

父の終焉日記と観無量寿経の世界

黄色 瑞華

はじめに

一茶、あるいは一茶の文芸と仏教、特に浄土教の関係を論じたものは少なくない。私もこれまでに、『おらが春第二十一話と教行信証』『校本おらが春』『寛政三年紀行』などで、いささかこの問題にふれてきた。本稿では、浄土三部経、すなわち『仏説無量寿経』『仏説観無量寿経』『仏説阿弥陀経』の中の『仏説無量寿経』の世界と一茶文芸について述べてみたい。なお、本稿は定稿ではなく、向後、加筆訂正を加えていこうとするものであるから、はじめに大方のご批判、ご教授を乞うておく。

いうまでもなく、一茶・小林弥太郎は、信州柏原の月原山明専寺の門徒、明専寺は浄土真宗西本願寺の末寺である。さらにこの際、一茶の家系、おいたち、生涯、特に生活環境や読書内容、交友というような面にもふれておくべきだと思われるが、いまその詳細はおくことにする。

浄土三部経は、法然が『選択集』の第一章で「正しく往生浄土を明すの教といふは三経一論これなり。三経といふは、一に無量寿経、二に観無量寿経、三には阿弥陀経なり。一論といふは、天親の往生論これなり。或いは此の三経を指して浄土の三部経と号すなり。」というにはじまり、今「浄土真宗本願寺派宗制」第三章・聖教の条には、「浄土真宗の正依の聖教は左の通りである」として、その第一項に、『仏説無量寿経』（康僧鎧訳）・『仏説観無量寿経』（曇良耶舎訳）・『仏説阿弥陀経』（鳩摩羅汗訳）と掲げてある。『仏説無量寿経』は、浄土三部経中最大の經典で、第十八願で誓われた純粹他力の念仏のみのりを説いて、衆生を救うことを明らかにされた、いわゆる他力念仏往生の教えである。一茶が日常よく耳にし、みずからも唱えたと思われるものに『正信偈』や蓮如上人の「御文章」（消息）があり、『おらが春』第二十一話の「たゞ自力他力何のかのいふ芥もくたをさらりとちくらが沖へ流して、さて後生の一大

事ハ、其身を如来の御前に投出して……」は、「御文章」の「モロ／＼の雜行ヲナゲステ、一心ニ弥陀ニ帰命スレバ、不可思議ノ願力トシテ、仏ノカタヨリ往生ハ治足セシメタマフ。」「モロ／＼ノ雜行ヲナゲステテ、一念ニ弥陀如来今度ノ後生ハタスケタマヘト、フカクタノミ申サン人八十人モ百人モ、ミナトモニ弥陀の報土ニ往生スベキ事、サラ／＼ウタガヒアルベカラザルモノナリ。」をふまえ、末尾の「是則当流の安心とは申也。穴かしこ。」は「コレ当流ノ安心決定シタル、信心ノ行者トハマウスベキナリ。アナカシコ／＼。」によるものである。

『父の終焉日記』（これも、その成立や執筆意図については、今、詳述を省く）、そこに描かれた父・弥五兵衛像は、一茶が生涯に描いた人物像のなかで、もっとも心をこめたもの、と異論はあるまい。

享和元年四月二十三日、弥五兵衛は悪性の傷寒に罹って病臥、たまたま帰郷中の一茶（三十九歳）はその看病に当るが、五月二十一日ついに帰らぬ人となった。『父の終焉日記』は、発病から臨終を経て、五月二十八日の初七日におよぶ約一カ月間の経緯を素材としている。

作品の内容は、四月九日と五月二十四日から二十七日までをばぶく三十一日の間における弥五兵衛・一茶と、継母さつ・異母弟仙六との対立抗争を弥五兵衛の最後という時間の設定のうえで、その遺産分配という争点をもって組みたててある。このうち、父・弥五兵衛の人を篤信として描いた部分はずいぶん多い。

① 廿八日 晴 祖師の忌日なり迎、朝とく嗽ぎなどし給ふに、熱のさへりにもやならんと止むれども、一向にとままり給はず。御仏にむかひ、常のごとく看経なし給ふに、御声低う聞ゆる、いかうおとろへ給ふ後姿、心細くおぼゆ。

くおぼゆ。

② (五月)三日 ……今迄神仏ともたのミシ医師にかく見はなさるゝ上ハ、秘法仏力を借り、諸夫庇護のあはれミを乞んと思へども、宗法なりとてゆるさず。……

③ 十五日 ……抑、床つき給ふ日より、朝夕の看経怠る時なくつとめ給ふに、今はおきふしもまゝならず、床にありながら、ともしびの影ほのかに、称名となへ給ふ声の常に替りて聞ゆるこそ、何となく心ぼそけれ。

④ 十九日 ……父うるハしく目をあき給ひ、い、い、いなん。連れて歩め。と云る。いづくへバし行給ふらん。と問ひければ、いふにやをよぶ、至心々々^(信樂)欲生我國。と病なき時の声のごとく、たからかになへ給ふ。心にかゝる事ばし「(の)」給ふ物哉と、心すまして居たりける。我もいざ／＼、と四度、七度、九度、いざ／＼、とばかりいへば、又すやく／＼眠り給ひき。後におもへば、是ぞ物の「(の)」給ひ終、おもへば辞世にてありし也。

父・弥五兵衛は病臥して後も、「朝夕の看経怠る時なくつとめ」、「いざ行ん」、「いふにやおよぶ、至心信樂、欲生我國」を最期のことばとしてもものいわぬ人となった、というのである。

『仏説無量寿経』（以下略して『大経』という）に、

設我得仏。十方衆生。至心信樂。欲生我國。乃十念。若不生者。不取正覺。唯除五逆。誹謗正法。

と、ある。法蔵比丘が世自在王如来に誓願した四十八願中の第十八・至心信樂の願である。「もし私が仏になることができたら、十方世界の衆生が至心に信樂して至誠心をもって疑いなく信じ願って私の浄土に生れたいとして、一声でも念仏するほどの者には必ずそれをはたせます。そ

れがかなわなければ私は仏になりません。ただし、父・母・阿羅漢を殺し、衆僧の和合を破り、仏身を傷つける罪と、仏の教えをそしめる者はその限りではありません。」というほどの意である。第十九願至心発心の願には、

設我得仏。十方衆生。發菩提心。修諸功德。至心發願。欲生我國。臨壽終時。假令不与。大衆圍繞。現其人前者。不取正覺。

と、ある。すなわち、「十方世界の衆生は菩提心をおこし、功德を積み、それを廻向して、浄土に生れたいと至心を以て願うでしょう。そういう者の臨終の時に、私は大衆にかこまれて、その人の前に身を現じ、浄土に迎えます」という誓いである。また、『大経』には釈迦如来が、阿難尊者に対して、つぎのように極樂往生の因を説いている。

諸有衆生。聞其名号。信心歡喜。乃至一念。至心廻向。願生彼国。即得往生。住不退転。唯除五逆。誹謗正法。

「いっさいの衆生が、諸仏の讃える名号のいわれを聞いて発心し、歡喜し一念でも無量寿仏にすがる心をおこすだろう。それは、無量寿仏が眞実の心から本願の名号を廻向してくださる利益によっておこすのである。この心をおこして極樂国に生れたいと願えば、すぐその場で無量寿仏の光明の中におさめられて、この世において正定聚不退轉の位に住し、浄土に往生することができるのである。」というのだ。

さて、『大経』の第十八願にある「十方衆生。至心信樂。欲生我國」。乃至十念。」という誓願に関して『大経』下巻には、

仏告弥勒菩薩。諸天人等。無量寿国。声聞菩薩。功德知慧。不可称說。又其国土。微妙安樂。清淨若此。何不力為善。念道之自念。著於無上下。洞達

無辺際。宜各勤精進。努力自求之必得超絶去。往生安養国。横截五惡趣。惡趣自然閉。昇道窮極。易往而無人。其国不逆違。自然之所牽。何不棄世事。勤行求道德。可獲極長生。寿樂無有極。

と、ある。すなわち、「釈迦如来が弥勒菩薩や諸天人たちに仰せらるるには、無量寿国の声聞、菩薩の知慧はとても説きつくすことはできない。また、その国土は、微妙なること、安樂なること、清淨なることは前に説いたとおりである。それがわかつては、つとめて善をなし、阿弥陀仏の本願が他力自然であることを信じて、貴賤の差別なく、平等に行き渡ってかぎらない、そんな浄土の果報を顕わす身にどうしてならずにいられようか。さればおのおの精出してみずからこれを求めなければならぬ。必ず生死を超えて安養国（浄土）に往生せよ。横（十方世界のいっさい）に五惡趣（地獄、畜生、餓鬼、人間、天上は迷によって趣く所）の因を断ち、仏界の道に昇ることきわまりないのである。浄土は他力のはからいによるから行きやすい。しかるにこの行きやすい浄土へ行く人のないのは、なげかわしいことだ。浄土は自然の力にひかれて往生するところである。なぜ世事をすてて修行し正道の功德を求めないのか。そうすれば、永劫尽きぬいのちを得て、寿命も楽しみも、ともにきわまりないものとなるのに。」と、努めて極樂往生を求めようとするのである。

『父の終焉日記』における父・弥五兵衛は、まず仏の教えにたがわず一心に弥陀に帰命する人物として登上する（①四月二十八日、③五月十五日）。五月三日、一茶は「医師にかく見はなざるゝ上へ、秘法仏力をかり、諸天庇護のあはれミを乞ふと思」うが、父は「宗法なりとてゆるさず。」「只手を空うして、最期を待より外へなかりけり。」と書いている。親鸞

は『教行信証』の「化身土巻」で『般若三昧経』を引いて、「自^ラ帰^ニ命^ニ仏^ニ、帰^ニ命^法、帰^ニ命^比丘^僧。不^レ得^レ事^ニ。余^道、不^レ得^レ拜^ニ於^ニ天^ニ、不^レ得^レ祠^ニ。鬼^神、不^レ得^レ視^ニ。吉^良日^ニ。」といい、『高僧和讃』のなかの「善導讃」で、「仏号ムネト修スレドモ／現世ライノル行者ヲバ／コレモ雑修トナツケテゾ／千中無一トキラハルル」と歌って、念仏をする身になっても、現世の福利を祈り求める者は、自力の行者と同じく、千人中の一人も極楽往生はかなわぬと誡めている。それは念仏の心が不純で、自覚が徹底していないからだとしたものである。また、「浄土真宗本願寺派宗制」第四章・宗風の条にも「既に正法に遇い仏願を信ずる宗門の人びとは、深く因果の理を弁え、禁厭祈咒等によって現世の福利を求めてはならない」とある。「宗法なりとてゆるさず」には父の確かな信心が象徴的に表現されているのだ。④五月十九日の「いざ行ん」は、かくのごとく信心の深い父の「辞世」として、当然の帰結というべきである。『大経』の第十八願の「至心信楽、欲^{シテ}生^{シテ}我國^ニ、乃至十念^{セシ}」は、「いづくへし行給ふらん」という一茶の問いに対する父のことばとして記されたのである。それは『大経』の第十九願「十方衆生、発^シ菩提^心、修^メ諸^ノ功^徳、至^ニ心^ニ發^シ願^ヲ、欲^シ生^シ我國^ニ。臨^ニ壽終^ル時^ニ、仮^ニ令^不下^シ。与^ニ大衆^ニ圍^シ繞^シ。現^シ其^ノ人^前上^者。」による。

宿世に積んだ善根の功德によって、仏法を聞信することを得た者が、命終るときに仏が来迎されることは、『仏説阿弥陀経』にも、釈迦如来が舍利弗尊者に語ったことばとして、

聞説阿弥陀仏。執持名号。若一日。若二日。若三日。若四日。若五日。若

六日。一心不乱。其人臨命終時。阿弥陀仏。与諸聖衆。現在其前。是人終時。心不顛倒。即得往生。阿弥陀仏。極樂国土。

と、ある。すなわち、「阿弥陀仏の慈悲について聞き、その名号を心に信じ、時の多少にかかわらず一心に称名念仏して心を乱さぬならば、その人が命終ろうとするとき、阿弥陀仏は大勢の声聞や菩薩がたとともに、その前に現われてお護りくださる。このような人は、いよいよ最期の時になっても、心は平静で、阿弥陀仏の極樂国に往生できるのである。」というのだ。まさに父弥五兵衛の最期は、法蔵比丘が誓われたごとく、釈迦如来が説かれたことである。

二

前述のごとき父弥五兵衛の最期に対して、一方の継母さつ、異母弟仙六については、

① 廿九日（父が遺産分配の指示をした後）仙六心に染ざりけん、父の仰にそぶく。其日、父と仙六いさかひして、事止ぬ。皆貪欲・邪知・諂曲に目くらみて、かゝる息巻へおこりけり。いかなれ〔ば〕不^レ観^{（願）}親^{（願）}養、任他五濁悪世の人界、浅ましき事なりき。

②（五月）二日 変起りて、いとくるしび給ふに、母、例のあらがひに見むきもせず。弟ハ分地此かた、父の中よろしからず、いかに腹がハリなりとも、かく浅ましくいどミあふとへ、過去敵どしとも思れ待る。……母ハ父へあたりつれなく、父の一寸のゆがみをとがめて、三従の戒をワすれたり。

③ (十二日、継母は病人に禁じられている井戸水を飲ませる。十三日、継母と異母弟は嚴禁の酒を飲ませる。) 十六日、家内の輩、弟を始として、父ハ今往生とげられなバ、よき世の仕舞、などさゝやきあふ。一人として父の本腹(復)ねがふものなし。只邪見キウマン(備)の咄のミにして、昔、老たる姥を捨けん遺風ともしられたり。

④ 十七日 (父ハ砂糖求たきよし云るゝに) 母は是迄の砂糖、何程く[△]と価かぞへ立て、また砂糖たうべる存寄か。死かゝる人につい多となりければ、又かれこれいさかひとハなりぬ。……いづれにもせよ、おそろしき欲界なり。此夜子一ツの比より大熱にして、冷水ほし「と」なん「の」給ひき。井に汲に出なんとすれば、父ハ童のごとく思るゝにや、父のおほせに、井に落るな、となど教訓ありければ、母ハ寝て居たりけるが、それを聞つけて、こなたのたからむすこ、さ程に迄愛せらるゝ物哉、と忽噴悪眼に角立、髪の毛ハ針を立たるごとく逆立、はたと白眼し目ざし、むべも大蛇ともなべきおもざし也。

などとある。

『大経』下巻に、

於此劇惡。極苦之中。勤身營務。以自給濟。無尊無卑。無貧無富。少長男女。共憂錢財。有無同然。憂思適等。屏營愁苦。累念積慮。為心走使。無有安時。

と、あり、釈迦如来が弥勒菩薩や諸天人に説かれたことばだが、「世間をみるに、この劇惡極苦の世をいともせず、ただおのれの肉体を養うための仕事に追われ、貴い人も卑しい人も、貧者も富者も、老人も若者も、男も女も、万人ことごとく財のために心をとられている。貧者は無いがために。富者はあるがために、心をとられて憂い案ずるといふ点では同様である。愁苦して、過去を思い未来を案じ、ただ欲心のために生涯走

らされて、心の安らかな時はないのである。」と、いうのだ。上巻には、
其有衆生。遇斯光者。三垢消滅。身意柔軟。歡喜踊躍。善心生焉。若在三途。勤苦之処。見此光明。皆得休息。無復苦惱。壽終之後。皆蒙解脫。

「衆生ありてこの光明(無量光仏・無辺光物・無碍光仏など十二光仏)にあり、無量寿仏の本願力を信ずれば、三毒(貪欲・瞋恚・愚痴)の煩惱は消滅し、体ゆたかに、心安らけく、歡喜が体内におどり、善心が生ずるものである。もし三惡道(地獄・餓魂・畜生道)の苦しみの中にあつても、この光明を見あげれば、すべての苦痛は去つて、安らかになり、また、苦惱は滅するのである。そして壽命が終われば、惡業煩惱から解脫して極楽に生まれるのである。」と、ある。されば、継母・異母弟は「遇斯光」ことなく、心の安らぐの知らぬ者たちなのだ、ということになる。そして、作者のいい分は、「何不下棄三世事」(三毒の煩惱や五惡趣の世事)。勸行シテ求中メ道德ヲ(正道の功德)。可シテ獲シ極長ヲ生ヲ。壽樂無レ有コト極ヲ。」に尽きる。

三

一家の抗争を語る作中の「一茶」は、『大経』下巻の、

人能於中。一心制意。端身正行。独作諸善。不為衆惡者。身独度脫。獲其福德。度世上天。泥洹之道。

の、思想を堅持する。造惡の衆生たる継母・異母弟は三毒の煩惱・五惡趣の世事に迷い、「父子兄弟、夫婦家室、中外親屬、当シテ相敬愛、無レ相憎嫉」スルコト。有無相通、無レ得ニ貪惜ヲ。言色常和、莫ニ相違戾一」スルコト。(『大

『経』(下巻)の教えにさからい、「憎み、嫉みあうばかり」だが、一茶は「ことばも顔色も和げ、互いに心解けあって暮らさねばならぬ」の教えを堅く守っている。『大経』の五悪を説く各段の末尾はすべて、「人能於中、一心制意……度世上天。泥洹之道。」と結んであり、それは「造悪の衆生の中であって、心を落つけ身を慎しみ、行ないを正しくして、諸善をなし、衆悪をなさないなら、来世にあつては世を超えて天上界に生まれ、涅槃の妙果を得る」ということなのだ。

この作品における語り手・作中の「一茶」もまた、『大経』の経文を背景に性格化され、比類なき孝子として描かれたのだ。「この作は日記資料を材料にして小説的構想によって組み立てられたもので、一般に誤り考えられているような単なる日記ではなく、実は構想された日記体の文学作品である。そして表の筋たる父の終焉記は、裏の筋たる亡父の遺言・遺書のあったこと、それがいかなる状況のもとになされたか、その内容はどんなものであったかをのべるのが主要目的で、そのための手段として終焉記の形態を借り用いたものであること、したがってこれを擬装された終焉記であることに注意すべきである。」^(注三)この終焉記が、父の遺産分配に関する遺言の文書の証拠として書かれたとすれば、かつて自然主義文学思潮の盛んなりしころ、暗面を描いたものとして激賞されたのは実は見当違いで、性格化された作者自身が登場して、みずからの利益のために有利な証言をしようとしたもの、と見なければならぬ。この作品が文書の証拠として正当であるためには、遺言をした父そのものの生き方が正当でなければならぬ。ついで証言者たる作中の一茶の

言動に難があつてはならないのだ。父・弥五兵衛は文字どおりの篤信、当然の帰結として安らかに往生をとげた。証言者一茶は、造悪の衆生の中にあつてただ一人諸善をなし、「来世にあつては世を超えて天上界に生まれ涅槃の妙果を得る」であろう人物として性格化されたのだ。

四

『父の終焉日記』には仏教語彙が多く、「五濁悪世の人界」(『大経』『小経』)、「五逆罪」(『大経』『観経』)、「邪見憍慢」(『大経』)、「嗔恚」(『大経』)、「至心信樂欲生我国」(『大経』)、「耆婆」(『大経』)、「願以此功德」(『観経』)等々はそのうちの浄土三部経の語彙である。た、その用法は、

- ① 五濁悪世の人界、浅ましき事なりき。(遺産分配に関して仙六、父の言にそむく)
- ② 五逆罪とも是に過てんやと、(他郷にある不孝をなげく)
- ③ 只邪見憍慢の咄のみにして、(継母、仙六、「父ハ今往生をとげられなば、よき世の仕舞」などという)
- ④ 勿、嗔恚眼に角立。(継母、父が一茶に対する心づかいに)
- ⑤ 互心々経欲生我国(父、最後のことば)^(信実)

と、いうふうである。すなわち、「五濁悪世の人界」は、継母・異母弟の住む造悪の世界であり、しかも「五濁悪世」によって継母異母弟の性格

化を行なったと見るべきであろう。「邪見憍慢」「嗔恚」についても同様である。「五逆罪」は、一茶についていったものだが、いつまでも他郷にあって、父の意に添いえないことに対していったのだから、これは遺産の分配をうけ「御望通我も妻迎^へえして、御心のままに仕へ」ることによって解決する。したがって「五逆罪とも是に過てん」という、その因は継母の側にある。「至心信樂欲生我国」は即、生前の父である。

こうしてみると、『父の終焉日記』における四人の登場人物の性格化には『大経』の世界が色濃く映っているということができよう。

『父の終焉日記』後の成稿と思われる『寛政三年紀行』にも、浄土三部経の語彙が多く使われ、たとえば妙義山における山中の描写で「啻々たる鳥ハ仏土妙音の響かとも聞^えへ」や善光寺の段の「仏も寂光の月新たにかゝやきを添へ、蓮ハ花の盛を待て、九品の露「を」あらそふ。妙典読踊の声ハ普く「衆」生の心を和らげ」などには、浄土三部経に説かれた極楽国のさまが、背後に広がっている。それは『父の終焉日記』の父が「欲生我国」といった、「我国」その世界である。そしてまた、父の臨終に出迎えた諸菩薩のことは後に、『沙石集』の説話と融合して、『おらが春』の巻頭話として用意されることになった。

注

- (一) 以下、『父の終焉日記』本文は、古典俳文学大系本による。
 (二) 以下、浄土三部経の経文は、本派本願寺派勤式指導所編『勤行要集』による。
 (三) 大場俊助著『一茶の愛と死』百十一頁